

平成26年度専門医認定試験に対するコメントとその回答および正答の変更について(1/2)

	全体のコメント
コメント	今回は、異なる各論での内容ですので、同時選択はできませんので、影響はありませんが、各論A Q45と各論B Q50での「ILARのガイド」についての記載方法が異なっていました。 次年度以降、可能であれば統一した記載にさせていただいた方がよろしいかと思い、コメントさせていただきます。
	各論A 45 ILARの「実験動物の管理と使用に関する指針 第8版」
	各論B Q50 「ILARのガイド※」※実験動物の管理と使用に関する指針 第8版（アドスリー、2012年）
回答	次年度の作成時の参考とさせていただきます。
正答の変更	なし。

番号	共通 Q4
出題	Q4. 小腸についての記述で誤っているのはどれか。 1. 小腸は、十二指腸、空腸、回腸に分けられる。 2. 腸粘膜の表面には、腸絨毛と呼ばれる粘膜固有層を芯とした指状の粘膜突起が密生している。 3. 腸絨毛には、吸収上皮細胞、胚細胞、腸内分泌細胞が存在している。 4. 粘膜固有層には毛細血管や中心リンパ管が存在する。 5. 杯細胞は、粘膜を分泌する多細胞腺である。
正答	5
コメント	3の「胚細胞」は「杯細胞」でしょうか。（誤字） 5が不正解なのは明らかなので、特に対応は必要ないと思います。
回答	26年度の問題のコメントとして記載させていただきます。
正答の変更	なし。

番号	共通 Q18
出題	Q18. 実験動物とその性成熟期間の組み合わせで誤っているのはどれか。 a. ウサギ - 60～100日 b. モルモット - 35～70日 c. イヌ - 約6ヶ月 d. マウス - 70～80日 1. a - b 2. b - c 3. c - d 4. a - d 5. b - d
正答	5
コメント	ウサギ: 150～210日、モルモット: 4～8週齢、イヌ: 6～12ヶ月（早い個体で6ヶ月）、マウス: 約6週齢 4が正解では。
回答案	ご提案の通りです。
正答の変更	正答を4に変更します。

番号	共通 Q35
出題	Q35. Toll-like receptor (TLR)に関する記述で、正しいものの組み合わせはどれか。 a. TLRは動物の細胞表面にある糖タンパク質で、種々の病原体を感知して自然免疫を作動させる機能がある。 b. TLRまたはTLR類似の遺伝子は、哺乳類やその他の脊椎動物にあり進化的起源は比較的新しい。 c. TLRは、細菌表面のリポ多糖(LPS)、リポタンパク質、ぺん毛のフラジリン、ウイルスの二本鎖RNA、細菌やウイルスのDNAに含まれる非メチル化CpGアイランドなどを認識する。 d. Toll遺伝子はショウジョウバエで異常な糖タンパク質を産生する遺伝子として発見され、哺乳類にも相同性の高い遺伝子が見つかり、これがToll-like receptorと命名された。 e. 多くの哺乳動物で10から15種類のTLRが確認されている。 1. a - c 2. b - c 3. b - d 4. c - d 5. a - d
正答	5
コメント	TLRsの局在は細胞表面だけでなくエンドソームに存在するTLRも存在する。aは表現が曖昧で誤解を招く恐れがあり適切とはいえないため、aを採点から除外する。
回答	ご提案の通り、aを選択肢から除き、1と5を正答とする。
正答の変更	aを選択肢から除き、正答を1と5に変更する。

平成26年度専門医認定試験に対するコメントとその回答および正答の変更について(2/2)

番号	共通 Q43
出題	投与経路に関する記述として誤っているのはどれか。 1 静脈内投与は有害反応の危険性はあるが、有効容量を正確に投与できる。 2 投与経路に関する記述として誤っているのはどれか。 3 筋肉内投与は抗凝固薬使用中に実施してはいけない。 4 経口投与は簡便かつ安全な方法であるが、吸収は多くの因子に影響される。 5 直腸内投与は経口投与に比べ肝の初回通過による代謝の影響が大きい。
正答	3
コメント	例えば抗凝固薬のフォンダパリヌクスナトリウムの添付文書には筋肉内投与は禁忌とあるので3は正しい。経口投与は直腸内投与に比べて初回通過効果が大きいのでこの選択肢は間違いなので答えは5となる。
回答	3については、指摘の例もあり、正答は5とします。
正答の変更	正答を5に変更する。

番号	各論A Q3
出題	Q3. ウサギの解剖学的特徴の記述で誤っているのはどれか。 1. 口唇は上唇裂である。 2. 前肢に5趾、後肢に4趾ある。 3. 陰嚢内に2つの精巣を持つ。 4. 第三眼瞼がある。 5. とう骨、尺骨が完全に分かれている。
正答	5
コメント	5: 家畜比較解剖図説 上巻 第2版(養賢堂) p.68に、「犬・兎ではとう骨と尺骨はまったく独立し、とう骨近位端の関節環状面、遠位端の尺骨切痕は各々尺骨のとう骨切痕や尺骨頭側面と関節結合し、可動的である。」と記載されています。
回答	回答ご指摘の資料の他に、斉藤久美子訳、ウサギの臨床、P9、インターズーに「橈骨と尺骨は癒合しており曲がっている(癒合は高齢になると完全になる)」、Fukuda and Matsuoka., Exp. Anim. (1981) 30:497-501に「橈骨と尺骨の骨端が78週令の日本白色ウサギで不完全融合しているとの記載が、France, Human and Nonhuman Bone Identification: A Color Atlas (2008) P308, CRC Pressに成ウサギで癒合した橈骨と尺骨の写真が、それぞれ認められます。しかし、資料によっては5は正しいとしており、正答なしとします。
正答の変更	正答なしに変更。

番号	各論A Q4
出題	Q4. モルモットの解剖学的特徴の記述で誤っているのはどれか。 1. 鼓室が発達している。 2. 出生前から開眼している。 3. 乳頭数は1対である。 4. 子宮は分裂子宮である。 5. 精子の先体が鎌状である。
正答	5
コメント	4: 現代実験動物学(浅倉書店) p.138では、モルモットの子宮は重複子宮と記載されています。
回答	ご指摘のように、現代実験動物学では重複子宮と記載されていますが、モルモットの子宮は分裂子宮とされた記載も多い様です。4も誤っていると、正答を4と5に変更します。
正答の変更	正答を4と5に変更する。